

百舌の早贄（はやにえ）

◆活動報告・支笏湖烏柵舞の森(5月14日)

新緑を迎える前の烏柵舞の森で広葉雑樹へのマーキング作業が一斉に行われた。正午前、一緒に作業していた湯沢さんが「モズのはやにえ」だ！ との言葉で近づいてみると小枝に刺さったトカゲが日干になっている。5334 林班・標準値 No.2 の中央部で発見、地上から1000mmほどのところ。残念ながら、近くにはモズの姿は見当たらない。



帰宅後モズを調べて分かったことは、全長20cmほど、日本では全国の平地から低山地の農耕地や林縁、川畔林などに生息・繁殖。秋に最も頻繁に行われるようで、写真のトカゲも昨秋の仕業か。

はやにえの位置は冬季の積雪量を占うことができるという風説もあることから、冬の食糧確保という点でいえば、烏柵舞の森の積雪はここまで達していないことになる。

モズは、謎と言われる習性があり、様々な鳥(=百の鳥)の鳴き声を真似た、複雑な囀りを行うことが和名の由来(も=百)と

言われ、「百舌」とも書く。秋に高鳴きをしてなわばりを確保し、越冬したものは、2月頃から越冬した場所で繁殖する。秋に初めての獲物を生け贄として奉げたという言い伝えから「モズのはやにえ」といわれた。何のために早贄が行われるかは、よく分かっていない。

ワシやタカとは違いモズの足の力は弱く、獲物を掴んで食べる事が

できない。そのため小枝や棘をフォークのように獲物を固定する手段として使用しているためではないかとも

いわれている。また、空腹、満腹に関係なくモズは

獲物を見つけると本能的に捕える習性があり、

獲物を捕らえればとりあえずは突き刺し、

空腹ならばそのまま食べ、満腹ならば残すと

いう説もある。はやにえにしたものを後でや

ってきて食べることもあるため、冬の食料確保が目的とも考えられるが、そのまま放置す

ることが多く、はやにえが後になって食べら

れることは割合少ない。

小さなからだなのに、くちばしはタカのようにカギ型をしており、小鳥を捕らえたりもす

る。イギリスではモズを「屠殺人の鳥」といい、ドイツでは「絞め殺す天使」と呼んだりす

るのも、このはやにえから名づけられたものといわれる。

これらのことから、江戸時代はモズは凶鳥で、モズが鳴く夜は死人が出ると信じられまし

た。百舌は大阪府の鳥でもあり、堺市にある『百舌鳥』の地名は「仁徳陵築造の際、倒れた

シカの耳から、もずが飛び去った」(日本書紀)が由来しているという。(文・西野)



出典 : <http://www.suntory.co.jp>